

日本イエナプラン教育協会



ニュースレター Vol.17 2013. 1月号

発行元: 日本イエナプラン教育協会

編集: 山崎 那菜

住所: 〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: Info@japanjenaplan.org

新年のご挨拶には遅すぎますが、2013年のニュースレター第一号をお届けいたします。
年の初めにふさわしい充実した内容になりました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。
(編集 山崎)

第17回 『明日の学校のために』

~~~~大人であるあなた自身、未来を先取りして生きているか~~~~

協会代表 リヒテルズ直子

#### スース・フロイデンタールの言葉

イエナプランの創始者ペーター・ペーターセンが、ドイツのイエナ大学実験校での試みを「イエナプラン」として発表したのは1927年。今から86年前のことです。それから、およそ50年の後、1975年にオランダ・イエナプラン教育の母と呼ばれるスース・フロイデンタールは『明日の小学校に向かって』という論文を発表しています。それは、オランダが、産業化社会から脱産業化社会へと大きく変換を果たしつつあった激動の時代、後に人々が「静かなる革命」と振り返って呼んだ時代のことでした。多くの人々が、ただひたすらに利潤を生むことだけを至上命令として働き続けた結果、本来人間が望んでもいかなかったはずの環境破壊や人間性の喪失が生まれ始めていたことに気づき、人間の幸福の意味を問い直し、より良い生き方とそれを支える経済活動、そして、過去の遺産として受け止めた地球環境を汚すことなく未来世代へ受け継いでいかななくてはならないと考え始めた時代の最中でのことでした。

スース・フロイデンタールは、オランダが、ペーターセンの「イエナプラン」発表から50年も遅れてようやくこういう教育に目覚めたことを「なんと半世紀も遅れて」と嘆いています。学校教育が、人間性よりも、機械のように働く労働者を生んできていたことへの嘆きです。それに気づいていた人がいながら、黙認してそれを続けてきたことへの嘆きです。ですが、私たちの日本の学校教育はどうでしょう。フロイデンタールが嘆いていたその時代のオランダからも、さらに40年以上の遅れをとり、ペーターセンの時代にまでさかのぼれば、何となく、90年近くもの遅れをとろうとしているのです。

フロイデンタールは、オランダにあった世界新教育運動の支部で秘書をしていた人で、それだけに、いわゆる「新教育運動」の先進的試みには、以前から多く触れていた人でした。しかし、1950年代に彼女が「イエナプラン」と出会った時、「やっと私が探し求めていた教育に出会えた」と感嘆しています。実際彼女のその後の熱心なイエナプラン教育普及の運動は、この感動がなければ決して起こり得なかったものだったといえます。では、モンテッソーリ教育や、ダルトン教育や、シュタイナー教育など、それまでにオランダで普及していた新教育と比べて、いったい何が「イエナプラン」には独特だったのでしょうか。

私は、それは、イエナプランが、未来社会のあるべき姿を明確に描き、その上に現在の学校の姿を根底から作り直そうとしていたことにあると思います。皆さんもよくご存じの、「リビングルームとしての学校」は、ただ、ソファがあって「居心地の良い」教室というわけではありません。一人ひとりの生徒が「あるがままの自分」として居られ、自分らしさを最大限に開花させることのできる安心した場所という意味なのです。

私自身、オランダにやってきて、日本とは比べ物にならないくらいいろいろな新教育の姿を自分の足で歩いて訪ねて見えました。しかし、それでも、どうしても「イエナプラン」だけに心を掴まれてしまったのは、おそらく、フロイデンタールが当時のオランダの中で感じたのと同じものを、私は、まさに今の日本社会の状況の中で、痛いほどに感じたからだったのだらうと思っています。フロイデンタールの著「明日の小学校に向かって」という言葉が、深く心に沁みるのは、そのためなのです。

## あなたは未来社会を頭に描いているか

協会に参加しておられる会員の皆さんは、当然、いろいろな年齢層の方がいらっしゃると思います。日本が高度成長を遂げるよりも前に生まれて、高度成長の中で学校生活を送り、やがて仕事に就かれた方もいらっしゃるでしょうし、あるいは、生まれた時には、すでにバブルははじけていて、以来、日本の経済が低迷と後退を続ける中で育ち、繁栄も成長も知らないという若い方もおいででしょうし、その中間を生きてこられた方もいらっしゃるでしょう。しかし、自分自身がどんな時代に生きているとしても、社会が、どういうところからどういうところに向かっていくのか、世界はどういう風に変わってきているのか、一体、人類社会は、どこからどんな風に発展して、今どういう時代を経過しつつあり、それが目指すべき未来の姿とはどういうものであるべきなのか、その中で日本社会はどんな立場にあるのか、世界の動きと日本の動きとの連動の姿は、、、という風に物事を見るのは、教育者にとっては欠かすことのできない課題です。たとえ、そこに「正しい回答」というものがなくても、、、です。



「あなたは、教員として、あるいは、教育研究者として、または、親として、そして、社会一般の若い世代の人々とかかわることなしに生きていくことのできないひとりの大人として、世界と日本の未来がどうあるべきだと考えていますか」

この問いは、私たちが、繰り返し、自分自身に自問自答を続けていかななくてはならないだけでなく、同じ組織、同じ場にいる人たちが、常に、お互いの意見を交換しておくべき問いであると思います。皆の意見を同じものに統一するためではなく、それぞれが、自分自身の考えを自覚し、他の人の考えを知るため、そしてそれを通して自分のビジョンをさらに洗練させたものにしていくためです。そういうことを一切やらずに、20年後に学校を卒業し、それからさらに、50年後60年後の時代を生きていく子どもたちの基礎形成を、いったいどうやってやれるのでしょうか。そういうことを考えない、議論し合わない「教育者」を果たして「教育者」と呼んでよいものなのでしょうか。

## 対症療法は未来への目を濁らせる

日本に限らず、今先進国では、二つの大きな流れが対立しているように思います。

一つは、中国やインドなど、新興近代化諸国の経済発展の勢いを恐れ、学力競争に駆り立てようとする動き、そして、もう一つは、新しい知識情報社会の中で、子どもたちの能力として、従来の学校で重視されてきた読み書き算(3R)よりも、創造力、コミュニケーション能力、シチズンシップ、協働、批判的思考といった、機械にはできない人間の頭の中での働き、共同体の中で他者と共に生きていく力を問うものを学校教育の一環として重視していこうという動きです。

ここで、重要なのは、前者の見方が、対症療法的な、時間的にも見通しが短いものであるのに対して、後者の見方は、社会のあり方を根本から見直して、長期的に持続性の高い社会づくりに寄与することを指向していることです。とかく、政治家の政策は、前者に傾きがちです。自分の任期の間に、政策効果を早く表すことに焦点が置かれるためです。それが、公教育を内側から壊してしまうのです。だから、本当に後者の見方を支えるのは、教育現場にいる教員と子どもたちの親たちでしかないのです。それは、個人的な政治的意図のためではなく、自分がやがてこの社会を引き渡していく未来の市民の幸福と、永久に続く地球の姿を願っての思いに根差したものです。そして、大切なのは、本当の学力、本当に生きて使える学力は、後者の力がなければ育たないということ、もっと言えば、後者の力のある子どもは、人から言われることがなくても、自分で、自分にとって意味のある知識やスキルを磨いていくようになるということです。

もう一度、皆さんに問います。

「あなたは、日本と世界が、未来にわたって人間の棲家として安全、安心の場であるようにするために、そこで生きる理想的な人間として、どういう能力を持った人間を頭に描いていますか。その人は、その未来の日本と世界で、どんなふうに生きているのでしょうか」

学力テストで首尾よく好成绩を収める人間ですか。もちろん、学力の発達は重要です。テスト結果はよいに越したことはない。しかし、それだけが本当に大切な人間の能力なのでしょうか。

ましてや、人間は一人ひとり顔が違うように考えることも一人ひとり違います。そして、この違いが、人間社会を、動物の群集社会と区別しているものです。そういう一人一人異なる人間を、あなたは、どこに導いていきたいと思っていますか。

日本の学校にあるとても大きな問題は、先生たちに「失敗」が許されないことです。子どもたちが、教科書に書かれた通りに行動し、教科書に書かれた通りのことを頭に入れておけば「よい子」になれるのと同じで、先生たちにもたくさんの縛りがあり「よい先生」像を他者から押し付けられています。学級経営も子どもの成績も授業の内容にも、「自由裁量」の余地がほとんどありません。そういう厳しさは、私自身、痛いほどよくわかるのですが、そういう中であって、この学校のあり方を「受け入れ」「順応して」しまうのか、それとも「おかしい」と疑問を呈していくのかでは、大きな違いがあります。あなたにとっては苦しいことかもしれませんが、それが、子どもたちを救うのです。そして、日本のように、規則が多く、しかも、周りの人たちががんじがらめで同調を求めてくる場で、「おかしい」と言葉に発することすらが、恐ろしくてとてもできないことではないのでしょうか。でも、子どものすぐそばにいるあなたが、その努力を止めてしまったら、いったい誰が、子どもを守ってやれるのでしょうか。親もまた、あなたが、心を開いて話し合う努力をすれば、きっとわかってくれるはずです。誰よりも子どもの幸福を願っているのは、親に他ならないのですから。

だから、繋がってほしいのです。周りを見れば、気が滅入るほどに、皆、自分のことだけしか考えられないほど追いつめられている人たちがばかりに見えるかもしれません。でも、あなた自身は？ あなたは、仲間を作ろうと、手を伸ばしていますか。あなたの思いを熱く誰かに伝えようとしていますか。あなたはきっと、孤独で、戦えど闘えど自分が押しつぶされ切り裂かれていくように感じていることでしょう。表情からは、微笑みが失せ、自分自身を蚕のように閉ざしているかもしれません。だから、仲間が要るのです。周りに目を向けてみてください。誰とも言葉を交わせずに孤独の中で苦しんでいる人がきっと見つかるのではないのでしょうか。

## 方法ではなくコンセプト

ただ、仲間にいるということ、を、「同じこと」「同じやり方」をする人だと誤解しないことです。あなたに、あなたとは「異なる」意見を言ってくれる「信頼できる」仲間こそが、本当の「仲間」です。あなたの見方や意見に、違う立場から感想や自分の意見を言ってくれる人は、あなたにとって『学び』のチャンスです。お互いにそう思える仲間を探してください。

教育は、生きた大人と生きた子どもとの間に起きる有機的な営みです。教えているのがあなただから『見えていること』があり『見えないこと』がある。同じように、生徒を、30人とか40人とかの個性のない人たちの群れとしてみるのではなく、そこに、一人ひとり個性を持った生徒が集まり、しかも、その場に生まれた子供たちの組み合わせがあるから、その場にしかない『学び』の機会が生まれるものなのです。



仲間とは、見方が違うもの、見ているものが違うもの同士が、定期的に出会い、意見を交換することで、自分自身の見方の限界と出会い、新たな視点を学ぶためのものです。だから、どうか、忌憚ない意見を交換できる、良い仲間をお互いに育ててください。

「対話が大事」「サークルを作って話をする機会を定期的に設けましょう」というのは、イエナプランの一つのコンセプトです。しかし、その場を、木の切り株に座ってやるのか、畳に座ってやるのか、長椅



子を使ってやるのか、それは、子どもたちの間で『グループリーダー』として子どもたちの学びをファシリテートするあなたが、独自に考え出し工夫していけばよいことなのです。人間を育てる教育が、生きた人間でなければならないのは、そのためです。指導書とルールだけではカバーできないのが人間形成というものです。その結果、どううまくいかないとか、これはうまく行ったという気付きがあれば、それを仲間との会話に持って行って伝え合えばよい。そこからまた新しいアイデアが浮かんでくるかもしれません。

「リズム的な時間割」。対話と自習や協働学習、合間の遊び、そして大小の催しをしてお互いに共感し祝合う、そうした活動をリズム的に展開し、教科別の授業をしないというのも、イエナプランのコンセプトです。ですが、だからといって、ある学校で試みられた時間割を、自分の学校でもそのまま使えるかというところではないことの方がきっと多いでしょう。これも、そこで受け持っている子どもたちの様子や特性に合わせて、また、学校や教室が置かれているその時その時の環境によって、これが最善、ここならこんなことも取り入れてみる事ができると判断してやるのが、グループリーダーであるあなた自身の役割なのです。

### 子どもたちのモデルとして生きる

こうして、教えているあなたが、自分の頭で納得のいくように考え、自分の心に照らして「恥ずかしくない」「罪を感じない」、そして、何よりも「自分らしく」率直に生きていること、自分とは異なる『他者』を受け入れ、意見の対立を怖れない人間であること。実は、あなたがそうして生きていることが、子どもにとっては何よりも信頼できるモデルであり、自分自身を信頼して生きていく人間を育てる基本でもあるのです。そして、自分を深く知り、他者を受け入れ、また、死ぬまで問い続け学び続ける人間をたくさんたくさん育てておくことだけが、私たちの棲家である地球を長く健全に維持していくための唯一の道なのです。



## 根幹グループワーク

フレーク・フェルトハウス

この記事は、オランダ・イエナプラン教育協会(NJPV)の機関誌「メンセン・キンデレン」の最新号(2012年11月号、28巻133号)に掲載された記事です。オランダ語を勉強中の奥村天志さんに下訳をお願いし、リヒテルズ直子が監訳しました。

ワールドオリエンテーションはイエナプラン教育のハートです。つまり、ワールドオリエンテーションが教育の中で最も重要な部分であるということは、ほかにどう変えることもできない事実なのです。それでは、大半の授業時間はワールドオリエンテーションに費やされているのでしょうか。それともそうではないのでしょうか。実を言えば、そのどちらとも言えます。ワールドオリエンテーションがイエナプラン教育のハートであるならば、ワールドオリエンテーションは授業の中の最も重要な部分であるはずだし、そのために最も多くの時間が費やされるはずで

でも、本当にそうになっているのでしょうか。私たちはワールドオリエンテーションを本当に教育のハートとして取り扱っているのでしょうか。そうだとすれば、実際にそれをどうやっているのでしょうか。ワールドオリエンテーションを、本当に私たちの教育のハートにするためには、私たちはどうすればいいのでしょうか。

### 世界の探検(ワールドエクスプロレーション)

実をいうと、私はワールドオリエンテーションという言葉にはあまり満足していません。この言葉は、私には受動的すぎるように思えるのです。ワールドオリエンテーション、自分で自身を方向付けていく…この言葉から私が想像するのは、誰かが手をポケットに突っこんで、何か遠くにあるものを眺めている様子です。何もかもが静かで、その真ん中にその人は立っている。そしてそれはイエナプラン校で起きていることとはどうも合致しないのです。イエナプラン校では、子どもたちは、まるでベルトコンベアの上で、発見したり、探究したり、実験したりとアクティブにかかわっています。一日の終わりに、子どもたちは額に汗を

浮かべている。そういう姿は、オリエンテーションという感じではないのです。「探検(エクスプロレーション)」という言葉の方が、すくなくとも私にとっては、ずっと良い言葉に思えます。「世界探検(ワールドエクスプロレーション)」としてはどうでしょう。この言葉の中には、何かもっとアクションが含まれています。この言葉だと、私は、誰かが、すぐさま活動に取り組み、アクションを起こし、何かを実際にやり、いろいろなことについて探求している姿を想像します。そして、その人はリアリティ(現実世界)の真ん中に立っている。私は、ワールドオリエンテーションという言葉の代わりに、世界探検(ワールドエクスプロレーション)という語が、一般的に有効な用語として用いられるようになって、悪くないのではないか、と思います。

## 学科目

地理、歴史、生物、技術といったものは学科目です。私は、大人として、リアリティ(現実世界)をこういう科目に分断することに慣れてしまっています。世界は、本当は、一つの大きな全体であるにもかかわらず、です。私が、あるとても重い石を持ち上げようとしても自分の手や筋肉だけでは持ち上がらない時、棒を持ってきて槌子にして石を持ち上げることができたなら、ダンゴ虫が、急いで逃げまどい、どこか暗いところに隠れようとするのを見つけるでしょう。そうしていると今度は、突然、槌子にしていた棒が折れ、ギリギリのところ、けがをせずに済んだということになるかもしれません。こうやって、私は、世界を探検すること、つまりワールドオリエンテーションのために忙しくしているわけです。

こういうことは、皆、1分もかからない間に起きることです。もちろん私はここでのアクションを学科目に切り分けることができます。ここでの出来事を、あらゆる学科目に、「バラバラにしていける」ことができます。地理(例:これはどういう種類の石か)、歴史(この石はどれくらい古いものなのか)、生物(ダンゴムシに耳や目はあるのか)、技術(長い棒を使うと、持ち上げる力よりも少ない力で済むのか)というように。

この出来事を、私は学科目の中では経験していないし、私は、お互いに排他的に仕切られた囲いの中にとどまることもありません。この出来事は、私にとっては一つのまとまりのある全体なのです。このことは、私たち大人にとってよりも、子どもたちにとってもっとはっきりと言えることなのです。

でも、ちょっと待ってください…それでは、ワールドオリエンテーションというのは、学科目があつまって全体になったものと同じなんでしょうか。

## 共に話し、共に遊び、共に働き、共に祝う

通りを歩いている人にワールドオリエンテーションって何だと思えますかと聞くと、大抵の回答は「地理と歴史と生物と技術のことでしょ。」となるでしょう。また、多くの先生たちも、ワールドオリエンテーションは学科目を組み合わせただけだ、と思っています。でも、ワールドオリエンテーションは、それをもっと超えて多くのものを含んでいます。算数や国語はワールドオリエンテーションの重要な部分を成しています。先ほど皆さんに紹介した例を考えてみましょう。国語(ダンゴムシ(pissebed)はなぜダンゴ虫(Pissenbed)と書かないのでしょうか)、算数(ダンゴムシを何匹数えられますか?) 国語と算数もワールドオリエンテーションに属しています。国語や算数なしでは、ワールドオリエンテーションはほとんど不可能です。ここでも私は、ワールドオリエンテーションという用語がなぜあまり嬉しくないのかの理由を挙げるすることができます。みんな、ワールドオリエンテーションとは、学科目のうちのいくつかだけに関わるもので、国語や算数は、ワールドオリエンテーションには属さない、と考えるからです。

それに、私だったら、芸術教育も忘れません。これもワールドオリエンテーションに属するものです。演劇(ダンゴムシのように歩くことができるだろうか?)、ダンス(ダンゴムシダンスを考えらるか?)、造形芸術(ダンゴムシの絵を描けるか?)、そして音楽(ダンゴムシの歌を作れるか?)。

ワールドオリエンテーションは全ての学科目を合わせたものよりも、もっとたくさんのもので多くある。ワールドオリエンテーションには、算数と国語も、確かに、芸術と同じように、属しているのです。

でも、こうしてきてみても、まだ、ワールドオリエンテーションに属するもののすべてを捉えきれてはいないのではないか、という気がします。ワールドオリエンテーションについては、共に話し、共に遊び、共に働き、共に祝うものとして記述した方が、まだずっと良いのです。

## 根幹グループワーク

だから、わたしは、ワールドオリエンテーションという語を根幹グループワークと言い換えたいと思います。根幹グループワークは、学科目それぞれが持っている境界線を取り除きます。ワールドオリエンテーションの中にある受動的な「オリエンテーション」という言葉も、根幹グループワークという能動的な言葉に置き換えられます。それは、もっとたくさんアクションを意味しています。さらにここには、『一緒に』という言葉が持つ利点もあります。根幹グループの仕事です。根幹グループの一人ひとりのメンバーが一枚の報告書を作るというわけではありませんが、根幹グループの生徒たちは、自分たちで作った問いを基に、その解決に向けてみんなで一緒に仕事をします。子どもたちは、先生が考えた課題に対して仕事をするのでは

なく、自分自身が提示した問いに対して仕事を進めるのです。根幹グループのリーダー(担任の教員)も含め、一緒に、自分たちの問いや問題について調査をしたり研究したりします。

そういうわけで、この記事の中では、以下に続く箇所では、ワールドオリエンテーションという言葉の代わりに、根幹グループワークという言葉を使うことにします。

でも、根幹グループワークだけが教育の全体だというわけにはいかないのではないですか、とか、子どもたちは、インストラクションを受けたり練習したりもしなければならぬでしょう、と言う問いが聞こえてきそうです。もちろん子どもたちはインストラクションを受けなくてはなりません。それは、コースの授業として行われます。ペーター・ペーターセンは、すでに彼の時代に、Gruppenarbeit(ドイツ語の根幹「グループワーク」)とKurse(ドイツ語の「コース」)との間を区別しています。

### 根幹グループワークとコース(講座・講習)

イエナプラン校では、根幹グループワークとコース(講習)とが行われなければなりません。コースの時間に、子どもたちは説明を受けます。その説明は、グループリーダー(担任の教員)からのこともあれば、根幹グループの別のメンバーからのこともあります。また、根幹グループリーダーのイニシアチブによることもあるし、時には、根幹グループワークから生まれた問がそれを必要とすることもあります。そしてコースでは、子どもたちは、当然、彼らができそうなものだけ、まだ完全には出来ないことを練習するのです。練習は必要であるし、練習は芸術です。練習すればするほど、ますますよくなっていきます。根幹グループワークの中では、子どもたちはコースの中で学んだことを応用します。反対に、子どもたちは、コースの中で、根幹グループワークの間に必要なことを学ぶのです。下のような図を使うと、これをうまく説明できます。

| 根幹グループワーク  | コース                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 応用する<br>考案する                                                                                | 練習する<br>まねる<br>実施する                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| スキルを応用して使う                                                                                  | スキルを学ぶ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 問題をより大きな全体の中に見る                                                                             | 問題を個別に独立させる                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 全体                                                                                          | 部分                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 評価する                                                                                        | 確かめる                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 力のあるところに注目する                                                                                | 知識などが欠落しているところに注目する                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 活性化し、刺激する                                                                                   | 補助したり修理したりする                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 研究・調査する<br>発見する<br>実験する                                                                     | 自律的に仕事をする<br>    |

### 問い

根幹グループワークの中では、問いが中心的役割を果たします。それも、私が意味しているのは、根幹グループリーダーからの問いではなく、子どもたちからの問いのことで、子どもたちからの問いは、実際、根幹グループリーダーからの問いよりも、ずっとはるかに重要です。根幹グループリーダーたちの問いは、しばしばホンモノの問いではなく、教えるために必要な教授上の問いです。根幹グループリーダーは、その答えをずっと前から知っています。グループリーダーは、好奇心からではなく、(よくてもせいぜい)子どもたちを解決に導いていけるように手助けをするために問いを發します。そういう問いは、しばしば、子どもたちがちゃんと理解しているかどうか確かめるためのもので、ひどい場合には、先生たちの問いは、注意して聞いていなかった子どもたちを指摘するためのものです。

この、教授上の問いかけは、子どもたちを、先生の頭の中にある「よい答え」は何かと推測させるように促していきます。根幹グループリーダーが与える良い問いとは、子どもたちの問いかけを刺激し、それを支



## 現実の時事

根幹グループリーダーは、現実には起きている時事をいつも根幹グループの中に取り入れます。大きな時事には、私たちがすんでいる地域、街、州、国(オランダ)、そして、残りの世界の中で起きていることがあります。しかし小さな時事もあります。それは、私たちの根幹グループ、学校で起きることです。それは、生きるということについて、生きるために、また、生きることを通しての、現実の中での学びなのです。根幹グループは、現実を取り上げ、現実を用いて学びます。時事は、そこで、重要な役割を果たすのです。

サークル対話をすれば、時事は、自然に根幹グループの中に入ってきます。根幹グループのリーダーが、最低限の好奇心を持っていれば、の話です。しかも、私は、ここで、子どもたちがそこで紹介することについて好奇心を持っているか、と言うことを言っているのです。好奇心があれば、グループリーダーは子どもの話しに本当に耳を傾けますし、わかろうと努力します。そして自分でもホンモノの問いを発することによって、子どもたちから出た問いを刺激します。それは、答えに注目することよりもっと大切なことなのです。もちろん、それぞれの問いには答えが出て来なければなりません。しかし、でてきた答えには、すくなくとも10個の新しい問いが生まれることでしょう。あつという間に、問いにいっぱい囲まれてどこで留めたらいいのかわからなくなってしまふことではしょう。

## エリー先生 の体重は何キロ？

わたしは、ある上級生のグループ で月曜日の朝のサークルを見ていました。  
F「僕のお母さんは今朝不機嫌だった。クリスマス休暇に3キロ太ったからなんだ」  
N「3キロ？」  
F「うん、3キロだよ」  
E「3キロって多いの？」  
F「お母さんは、一週間に3キロはとて多いって言ってたよ」  
根幹グループリーダー「あなたたちが3キロもふえなくてよかったわね」  
P「どういふこと、先生」  
A「先生、私たちだからって関係ないでしょ？子どもに3キロ増えたって、お母さんに3キロ増えたって、変わりはないでしょ。」  
根幹グループリーダー「あなたたちは、体重が軽いから、3キロというのは、割合にしてはずっと大きいってことよ」  
N「君のお母さんの体重は何キロ？」  
F「正確にはわからないけれど、だいたい72キロって言ってたよ」  
N「ねえ先生、先生の体重は何キロ？」  
E「女の人にそんなこと聞いちゃいけないよ」  
P「蜘蛛の糸のエリーさんは何キロかな？本当はよくないかもしれないけど」  
A「エリーさんは3キロ増えたって気づかないよ」  
P「一回うんちをすれば、また3キロ軽くなるんじゃない？」  
根幹グループリーダー「あなたは自分でも太った(ときの)と思う？」  
P「僕は自分が何キロなのかも知らないよ」  
F「私のお母さん、カロリーをとて多気にしているよ」  
E「カロリーって何？」  
根幹グループリーダー「私たちが、クリスマス休暇の間にみんな太ったかどうかを知るためには、どうすればいいかしら？」  
A「エリー先生は何キロあるのかなあ。体重計は120キロまで量れたよね？」  
P「ふたつの体重計に乗ればいい」  
N「ふたつの体重計にのれるわけないよ。それでエリー先生の真ん中を測るわけじゃないから」  
P「そんなこと関係ないわよ。両方の体重計の値を足したら、先生がどれくらい重いかわかるじゃない」  
A「僕、最低200キロはあると思うな」  
P「あのさあ、一度大きな体重計を玄関マットの下に隠してさ、それからエリー先生がやってきたときに、先生がどれくらい体重があるか、見てみようか」  
E「そんなの失礼よ」

この会話はその先もまだずっとしばらく続いていきました。最終的には、根幹グループリーダーが、ボードの上に10個の最も重要な問いをまとめました。それは同時に30分間という小さなサークル会話の内容をまとめたものとなりました。

えるような問いです。そこでは、本当の問い、すなわち、先生自身ですらその答えをまだ知らないもの、そういう問いが、私にとっては、カギとなる役割を果たすものなのです。そして根幹グループリーダーは、当然、何もかも知りたいし、何もかも理解したい。根幹グループリーダーは好奇心に満ちていて、現実に行き始めている時事の中で見聞きすることの全てに関して、どんどん問いを発します。

1. 私たちはみんな一緒に何キロあるのだろうか？
2. カロリーって何？そしてどこにたくさんのカロリーがあるのか？
3. どうして、太った人たちが増えているのか？
4. 脂肪、炭水化物、卵白、糖分って何？
5. 太っているのがそんなに悪いことなら、なぜ私たちの身体はそういうことをするのか？
6. 私たちの学校の先生たちは何キロあるのか？
7. なぜ特に太った人たちや痩せた人たちは自分の体重を言いたがらないのか？
8. 72キロのFのお母さんが3キロ増えるのと同じ比率で、40キロの子どもの体重が増えるとしたら、その子どもは何キロ増えたことになる？
9. クリスマス休暇になるとみんな太るの？
10. エリー先生の体重はどれくらい？

これは、子どもたちの問い、つまり、根幹グループの問いだった。私には、たくさんの側面を一緒に合わせて説明する必要はもうありません。この例の中には、嫌と言うほどたくさんの算数が入っているし、たとえば、エリー先生の体重に関するときなど、倫理的事実、尊重すること、マナーを持って行動するとかいうことも含まれています。

### 少しずつ段階を踏んで

サークル会話をやれば、ほとんど自然に根幹グループワークができてきます。始める時には、小さくはじめましょう。10個の問いからひとつを選んで、二人の子どもにその問いに取り組ませましょう。例えば、私たちはみんな一緒に何キロになるのか、という問い。根幹グループのリーダーとして、だれか二人の子どもに、その答えを探るようにと言います。そしてあなたは、次の金曜日に、中休み(フルーツを食べる休憩)の直前に、その答えをみんなに発表するようにと言います。あなたは、根幹グループリーダーとして、脂肪、炭水化物、卵白、糖分について調査するという課題を担当します。二人の子どもたちが、金曜日の休憩の前にプレゼンをするのと同じように、あなたも、このテーマについて授業をする準備をします。

もちろん、あなたは、その週の間、二人の子どもたちにガイダンスを与えます。あなたは子どもたちをそのプロセスの中で支え、この子たちのプレゼンテーションが最高に素晴らしいものになるように、導いていきます。そうすることによって、根幹グループの子どもたちは、次の週に、「ランプを持って歩くこと」(聖マルティンのお祝い)について10の問を集める時にも、一生懸命やろうという気になるのです。こんな風に、あなたは、根幹グループリーダーとして、グループワークの実施の早さを自身で定めることが出来ます。どれくらいの期間やるのか、どれくらい頻繁にこのテーマを取り扱うのか、と言うこともです。例えば、子ども読書週間とか他の学校規模でのプロジェクトのためにある一週間時間が取れなければ、翌週に延ばせばよいことです。

### 週末の発表会

根幹グループのプレゼンテーションは、もちろん、見事にやりおこせました。それについては、あなたは、根幹グループリーダーとして、よいものになるように注意を払うこともできます。拍手喝采、特にこの二人の子どもたちへ大きな拍手です。何かを探究したり発見したりすることはワクワクするものです。結果を見つけたことが、それをもっと多くの人たちに伝えたいという気持ちも引き起こしてくれます。そのために、週末の発表会をもってこの場所なのです。そこで、根幹グループの子どもたちは、その週に、グループで話題になったことや学んだことを他の人たちに伝えます。そうすると、これは、みんなのために学ぶ機会となります。なぜなら、それによって、すべての子どもたち、グループリーダーたち、そして、保護者たちが、体重や脂肪や炭水化物やたんぱく質や糖分について何か知ることになるからです。

私は週末の発表会には喜んで参加します。それは、単に見ることが楽しみというだけではなく、いろいろと異なったグループの中で、根幹グループワークにたいするリフレクション(振り返り)が直接得られるからです。







◇◆お知らせ◆◇

◆リヒテルズ直子氏の帰国に合わせ、2013年4月21日(日)国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)に於いて、イエナプランのワークショップを開催します。詳細はメールリストやFacebook等でお知らせいたします。ぜひご参加ください。

◆2013年春季オランダイエナプラン研修が3月10～15日に開催されます。今期は定員に達したため募集を終了しておりますが、次回は8月19～23日に教員向け研修を予定しております。こちらも詳細が分かり次第お知らせいたしますので、どうぞ楽しみに！

★各支部のご案内

東京支部 info@japanjenaplan.org

千葉支部 chiba@japanjenaplan.org

埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org

京都支部 kyoto@japanjenaplan.org

福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org

ニュースレターへのご意見ご感想をお寄せください。

より充実したニュースレターの制作のために、みなさまのご意見・ご感想をお送りください。リヒテルズ直子さんへの質問も常時募集中です。いただいたご質問への回答は、順次ニュースレターにて公開いたします。

イエナプラン教育に興味・関心をお持ちの方々とのネットワークを広げていきたいと考えています。みなさまの活動(体験談・実践してみた上での悩みや失敗談など何でも)をニュースレターやFacebookで紹介し、イエナプランの輪を広げていきたいと思っています。ちょっとしたことで構いません。ぜひ以下URLまでお送りください。

info@japanjenaplan.org

心よりお待ちしております。

協会のFacebookページができました。

協会のページができました。イエナプランに関心をお持ちの方や、多様な教育に興味がある方が、お互いの活動や意見を共有できればと思います。お気軽にご投稿下さい。

